

教育の原点に気付く

宮崎県教育庁中部教育事務所
教育推進課 指導主事 日高 太志

「へき地教育は教育の原点である」と言われます。「その言葉の本質を捉えたい」という想いと「一人一人を幸せにしたい」という気概をもって、平成29年に家族を引き連れて、へき地校に赴任しました。

本稿では、へき地教育における実践を通しての気付きとへき地教育への思いを綴っていきます。

○ へき地校での授業実践

私が3年間で受け持った学級は、いずれも2学年からなる複式学級でありました。赴任した当初は、複式授業の進め方に戸惑う日々が続きました。それまで子どもたち主体の授業について研究し、実践を重ねていましたが、まずは、複式授業に慣れる必要があると強く感じました。「複式指導の手引き」を開き、「わたり」、「ずらし」を知り、間接指導、直接指導等の言葉も覚えました。そして、前後型やL字型で2学年を指導し、子どもにとって空白の時間を生まないための手立てを自分なりに研究し続けました。夏休み前にはようやく複式指導に慣れ、2学期からは、子どもたち主体の授業を複式学級で少しづつ実践することができるようになりました。

また、少人数であるがゆえに一人一人の実態把握には努めましたが、児童が自己調整しながら学習を進めていくような指導はできなかったことが今となっては悔やまれます。この経験から、私は、授業改善に向けて研究することや、一人一人に目を向け対応することの大切さを知り、「へき地教育は教育の原点である」と言われることの本質の一端に触れた思いがしました。

○ 家庭教育の大切さ

へき地校に赴任して3ヶ月で実父が他界しました。赴任する前に、病院に立ち寄り、病床の父に「がんばってく」と誓っていたところでした。葬儀の関係で1週間、学校を休むことになりましたが、自習にならないよう先生方が配慮くださったことは感謝に尽きません。また、3・4年生の子どもたちが自発的に学校生活を送っていたことは、涙が出るほどうれしかったことを記憶しています。

また、当時、小学校1年生の長女、2歳の長男もへき地での生活を満喫していました。

長女は、小学校の隣の住宅から徒歩1分の登校時間だったのですが、3年間、上級生や下級生と一緒に通いました。また、毎日のように友達と遊び、楽しい日々を過ごしていました。

長男は、保育園に通い、いつの間にかみんなと友達になっていました。迎えに行くと、保育園の先生方が園での様子を事細かに伝えてくれました。さらに、海で泳いだり、山に登ったりして自然と触れ合うことができました。

半年も過ぎたころ、妻は、現地で働くようになり、すぐに現地の方と打ち解けました。私の赴任で来たはずなのに、妻のほうが有名になり、私は「日高先生」ではなく、「日高さんの旦那さん」と呼ばれるようになっていました。

3人ともへき地の生活を満喫してくれて、ありがとうございました。へき地で、家族と一緒に過ごす時間を確保することができ、家族とともに過ごした経験から、家庭教育の大切さを改めて感じました。

○ 地域の子どもは地域で育てる

総合的な学習の時間で「郷土料理を作ろう」という単元が新設されました。学校近隣の会社の方に説明し、相談に行ったところ「子どもたちの学習のためなら」と食材を寄贈してくれました。また、キャリア教育の一環として、職業見学も行いましたが、地域全体が協力的で、子どもたちを宝のように扱っていました。「もっと地域に出て、教育活動を展開すればよかった」と今になって後悔しています。「地域の子どもたちは地域で育てる」それができるのが、へき地での教育。そんなところからも「へき地教育は教育の原点」といわれる所以であると感じます。

「へき地教育は教育の原点」に少しですが、気付くことができ、私自身の教育の原点を築くことができました。

最後になりましたが、情熱と愛情をもって子どもたちと共に学び続けておられるすべての先生方、子どもたちを温かく見守り、応援し、育てていただいている保護者、地域の方々に敬意を表しますとともに、今後の益々の御活躍を期待いたします。